
SnowSmile

宇佐美拓都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Snow Smile

【Nコード】

N7639X

【作者名】

宇佐美拓都

【あらすじ】

一つ違いの幼馴染。

いつも一緒に、これからも一緒だと思っていた。

大学進学を決め、上京する彼女。

家を継ぎ、地元に残った彼。

ふたりの想いはただひとつ・・・。

大人へとなりながらも純粹でいようとする心。

開いた距離は二人の思いまでも引き離してしまうのか……。

「真夏の雪は熱く解けて」

「ユキちゃんねえ、東京の大学に行くんだって」

「へえー……」

俺は晩御飯のカレーをかきこみながら興味が無さそうに答える。ユキちゃんというのは近所に住む俺より1つ上の女の子。俺達は小さい頃からよく遊んでいて今でも仲は良かったから、それは母さんにしてみれば娘のような感じだったのだろう。

「あんたはどうすんの？進路」

「俺は継ぐよ」

「あら、意外」

うちは農家だったからそれを継ぐのが当然だと思っていただけで、最近巷で言われているような後継者不足なんて言う言葉は俺には無関係だった。

「ごちそうさま」

カレーを残さず平らげて、俺はそそくさと自分の部屋に戻る。そしてベッドに横になって、さっきの言葉を頭の中で何度もめぐるせた。

（ユキちゃんねえ、東京の大学に行くんだって）

東京の大学。どこだろう、俺の知っている有名なところか？いや、そんな名前なんてどうでもいい。

東京に行ってしまうということは、会えなくなってしまうことだ。

それは困る。

興味の無いフリをしていたけれど、興味が無いわけがない。
どうすればいい、今からユキちゃんに会いに行くか？

いや、こんな焦った気持ちのままではだめだ。

じゃあどうする？電話か？メールか？

俺は机の上に置いてあった携帯をとりあえず手にして、アドレス帳からユキちゃんの名前を探した。

「ちょっとカズー！ 牛乳が無くなっちゃったから買ってきてくれないー？」

何だよこんな時に！

こっちは忙しいんだ！

「ついでに、これもポストに入れてきて欲しいんだけどー！」

ああもう、行けばいいんだろっ！

俺は携帯を持ったまま階段を下りて、少し不機嫌そうに母さんから財布を受け取って、玄関に脱ぎ捨てておいたコートを羽織って家を出た。

「寒っ……」

部屋着にコートを羽織っただけの格好で真冬の田んぼ道を歩くのはさすがに寒かったけれど、ちょっと感情的だった頭を冷やすにはこれくらいが丁度良かったかもしれない。俺は少し早足で、歩いて10分ほどのところにある商店に急いだ。

と、俺が店の前まで差し掛かったとき、中から丁度女の人が出てくるのが見えた。店の前を照らす薄暗い街頭の下、自転車の鍵を外し

ているその姿に俺は確かな見覚えがあった。

「ユキちゃん？」

「えっ？なんだカズくんか。買い物？」

「ったく、いつも俺に頼むんだよ」

「ふふ、でも良かったじゃない、こうして会えたんだから」

ちよつと悪ぶっていた自分が子供に思えて、そんな大人なユキちゃんのことはもう真っ直ぐに見えいらなくなっていた。

「早く買い物しちやえば？」

「あ、ああ……」

俺はハガキをポストに入れてから店の中で牛乳を買って、ついでに肉まんも一つ買って店を出た。

「あ！ いいなあ……それ」

「ん、帰ってなかったの？」

外に出るとユキちゃんはまだそこにいた。そして俺のくわえている肉まんに熱い視線を送り続けていた。

「食べ……」

「食べる！」

即答。

その速さと満面の笑みで言われてしまったのは、俺の抵抗する隙は無かった。

「はむっ」

俺の差し出した肉まんに、俺が一口食べたその上から大きな口を開けてかぶりつく。

「おいし〜い」

俺はその大きな歯形と少しの口紅の付いた肉まんに魅入ってしまう。

「あ、ごめん。間接キスだ」

わざとらしく悪魔が囁くから、俺もそれには負けじと

「はぐっ」

さらに大きな口を開けて、その歯形ごと飲み込んで見せた。

「そんなもん気にしねえよ」

ユキちゃんはそんな俺の姿に目を丸くしてしまっていたけれど、今度は俺の手にわずかに残っていた肉まんの欠片に狙いを定めて、それを満足そうに頬張って「ごちそうさまっ」と微笑んだ。

「じゃあ帰ろっか」

肉まんを食べ終えた俺達は家の方向へゆっくりと歩き出した。すると間もなく隣を歩いていたユキちゃんが足を止めて俺に言った。

「ちょっと寄り道していかない？」

寄り道という言葉に、俺はかつてない緊張と興奮を覚えた。

俺達は近くの公園でブランコに座って話をしていた。

「ユキちゃん、東京行くん……？」

「うん。聞いた？」

「さつき母さんから聞いた」

最初は他愛もない世間話をしていたけれど、少し間が空いた一瞬、俺は本題を切り出した。

「じゃあ一人暮らし？」

「ううん。学校の寮があるからそこに」

「そっか」

俺は少し安心した。都会での女の子の一人暮らしは何かと危険が付きまとう。でも、学校の寮だったらそういう心配はしなくていい。

「カズくんはどうするの？来年は受験でしょ？」

「俺は家を継ごうと思ってるよ」

「大学行かないの？」

「たぶん……」

「そっか……カズくんがいないのは寂しいな……」

ユキちゃんは残念そうな寂しそうな顔でブランコを降りて空を見上げていた。

俺は躊躇ってしまっていた。

”俺もユキちゃんが東京へ行ってしまうのは寂しい”と。
でも、それはついに最後まで言えなかった。

「でも夏休みとかは帰ってくるから、その時に会えるよね」

ユキちゃんは振り返って悲しそうな笑顔で俺に言った。

ユキちゃんはお姉さんで、子供の頃から年下の俺をいつもリードしてくれていて、そんなユキちゃんが俺の初恋の人で、だけど一度もその想いは伝えたことが無くて、もしかしたら今日の偶然が神様が俺に与えた最後のチャンスだったかもしれなかったけど、俺はそれでもまだユキちゃんに何も言えなかった。

雪が溶け暖かくなった3月のある晴れた日、ユキちゃんは東京へ引っ越した。俺も一緒に引っ越しの手伝いをして、ユキちゃんとも話したけれど、もうユキちゃんがその話題に触れることは無かった。

俺はせめてもの思いで「またね」と見送って、ユキちゃんも「またね」と答えてくれた。

「さつきそこでユキちゃんに会ったよ」

8月。俺は受験勉強もせず毎日家でごろごろと夏休みを過ごしていた。だけどその言葉で飛び起きて、眩しい日差しの炎天下の中を走った。

そしてあの日の公園の前の交差点。道の向こうで信号待ちをしていた彼女を見つけた俺は

「ユキちゃん!!」

全力の想いでその名前を呼んだ。

く秋風に舞う風花はく

連日連夜の猛暑日熱帯夜。9月になったというのに、この地球もいよいよ悲鳴を上げたということか……。

この暑さでは、ニンジンもジャガイモもダイコンも、畑の作物達は美味く育ってはくれない。代々農家として継がれてきた我が家でもそれは例外ではなかった。

「つたく、いつまで30 が続くんかなあ……」

父さんのこんな愚痴ももう何十回、何百回目。

それに対する母さんの相槌を聞くのも何十回、何百回目。

そして、俺が他人事のように右から左へ聞き流すのも何十回、何百回目。

「あんたもちよつとは深刻に考えなさいよ？」

「分かってるよ」

「採るものも採れなくなったら、継ぐものも継げないんだからね」

確かに俺は去年の冬に、家業である農業を継ぐと言った。それには両親共に納得してくれて、畑の手伝いをして仕事を覚えていくという条件付きではあったけど、俺が夏休みを受験勉強もせずに遊び呆けていても何も言わなかった。でも、それもこの異常気象ではどうやら雲行きが変わってきたらしい。そんな怪しい雲行きを察知した俺にできることはただ一つ。雷が落ちる前に自分の部屋へ逃げることだけだった。

（メールが着てる……）

机の上に置きっ放しになっていた俺の携帯電話が健気に光り続けてそれを教えてくれていた。差出人はユキちゃん。彼女は大学が夏休みの間こっちに帰ってきているのだ。メールの内容は何だろう？まさかデートの誘いか？でも付き合ってるわけじゃないし……。

それなら何だろう……？

今何してる？

そうだな、その程度かもしれない。
こんなメールひとつで一喜一憂できるなんて幸せ者だ。そんなくだらない妄想を駆け巡らせるよりもさっさと携帯を開いてメールを確認すればいいのに。きつとユキちゃんならそうやって俺に言っただろうと、そんな妄想を思い浮かべながら俺はメールを開いた。

”デートしよっか？”

……………カチャン。

思わず携帯を閉じてしまった。

そしてもう一度、恐る恐る携帯を開いて、それを確認する。

本気か？ 本気なのか？

いや、絶対からかってるんだ。単純に遊び相手がほしただけなんだ……。

そうだ、きっとそうに違いない。ユキちゃんが俺をデートに誘うなんて……。

こんなにも汗が吹き出てきているのは、クーラーや扇風機を付けていないせいではないような気がしていた。

「良かったつ、カズくんが暇してて」

「何もしてないみたいに言うなよ」

少しくらいの期待はあった。でも、やっぱりユキちゃんはそういうつもりだったらしい。

「どうせ家でゴロゴロしてたんでしょ。分かるんだから」

「監視でもしてたのかよ……」

「お姉さんはすべてお見通しの」

お姉さん。そうだユキちゃんはお姉さんだ。昔から俺は弟のように見られていたんだろう。そしてそれは今も……。

聞き慣れないヒールの音がコツコツと響いている。昔はそんなもの履くような子ではないと思っていた。でもやっぱり都会に出ると、人は少しずつ、良くも悪くも変わってしまったのだろう。そのヒールの音は、ユキちゃんを悪い女へと変えていく呪文のようにすら聞こえていた。

そう、悪いお姉さん。

俺の気持ちに気付いていながら、あんな誘い方をしてくる、悪いお姉さん。

そんなことを考えていた俺の顔はさぞつまらなそうで無愛想な顔だったのだろう。ユキちゃんはさつきから幾度となく俺の顔色を伺っている。不安そうに、心配そうに、不満そうに、チラチラと視線だけを俺の方へと向けていた。でも俺はあえてそれに気付かぬ振りをして続いていた。それは全く何の意味もない俺の心の中の戦い。でも、俺にとっては大事な戦い。俺とユキちゃんのこの上下関係を逆転させるための戦い。逆転しなくても構わない。せめて対等になりたいという俺の想い。だから、つまらないかもしれないけれど、ここで気付かぬ振りをすることがそれに繋がると信じていた。

と、今まで聞こえていた煩わしい呪文が止まり、それに気付いた俺も足を止めて振り返る。

「何で無視するの……？」

「えっ？」

「ずっと気付いてたくせに……」

そうか、お姉さんは全部お見通しなのか……。

「無視したわけじゃないけど……」

「無理に誘っちゃったならいいんだよ……？」

「そんなことないって」

さすがに少しやり過ぎたのか。ユキちゃんのその沈んだ表情は初めて見るものだった。

「ゴメン。ちよっと考え事してたんだ」

すると、仕返しだろうか。

ユキちゃんは俺を無視して再び歩き出し、こっちなんて見向きもせずに真横を通り過ぎていつてしまった。

完全に機嫌を損ねてしまったのか……。これからどうすればいいんだろう……。

2〜3メートルの距離を置いて後を付いて行く自分の姿が情けなく、こんな時にどう対処したらいいのかもわからない自分はやっぱりまだ子供なんだと痛いほど感じた。

「カズくん。お昼食べた？」

「え？ いや、まだだけど」

「ハンバーガーでもいい？ 私おごるから」

「いいけど、それくらい自分で出すよ」

あれ……。聞こえなかったんだろうか……。

ユキちゃんはさっさと足早に店の中に入って行ってしまった。仕方なく俺も中に入ると、すでにユキちゃんはカウンターで店員と向かい合い注文をし始めていた。

「ああ、俺は……」

「カズくんのはもう頼んだよ」

急ぎ足で駆けつけようとする俺に、いたって冷静にユキちゃんはそう言った。何も言っていないのにいったい何を注文したんだろう……。

いや、それよりもやっぱりユキちゃんは怒っているのか。だからいちいち俺に何がいいかなんて聞かずに適当に注文してしまったんだろう。

でも、幼稚園に入る前から知っているユキちゃんだけど今までにこれほど機嫌を損ねた姿を見たことはなかった。さっきのことがよほど彼女の心を傷つけてしまったのか……。でも、たしかもつとひどいことをして泣かせたこともあった。それはずっと昔の子供の頃の話だけど、それに比べれば今日のことなんて……。そう思ってしまったから、俺にはもう何が何だかわけがわからなくなっていた。

そうやってまた考え事にふける俺をいつからかユキちゃんが見上げていた。

しまった。やってしまったか。今度こそ本当に全然気付かなかった。

「ん。何？」

「あの子可愛いね」

「え？」

「ずっとあの子見てたもんね」

ユキちゃんの視線の先には、アルバイトの子だろうか、初々しい顔立ちの俺よりも年下と思われる女の子が働いていた。

「な、何言っただよ。全然見てないって」

「知ってる。ボーっとしてた」

急にそんなことを言われて焦ってしまったのが馬鹿みたいに、ユキちゃんは落ち着いていた。

「何でさっきは嘘ついたのか知らないけど、そういうのはカズくんじゃないと思う」

「ごめん……」

「そのほうがカズくんらしい」

条件反射的に謝ってしまった俺をユキちゃんはクスツと笑った。さて、しかし、俺には大きな問題が残されている。ようやくユキちゃんにも笑顔が戻ったところで、俺はいたって普通に話を続けた。

「つか、何頼んだんだよ」

「何って、カズくんはいつも同じのしか頼まないじゃん？」

確かに。俺は必ずチーズバーガーとLサイズのコーラとLサイズのポテトのセットを食べる。でもユキちゃんと一緒にここに来たのは2回か3回か、そんな程度。それなのにそのことをしっかりと把握しているのは――。

「上行こっ」

注文したハンバーガーを受け取った俺達は階段を上がり2階の窓際

の席に座った。ハンバーガーの包み紙を広げるユキちゃんの手は、もうすっかり大人の女性の手に見えて、一口かじったその歯形がなぜか妙に艶やかで色っぽさを感じて、たった半年の間にユキちゃんという存在がまた少し遠くなってしまった気分になんた。

「さっき、上見た？」

そんな余計な考えをコーラで押し流す俺にユキちゃんが聞いた。

「上？」

「私のパンツ、見えた？」

「ぶはっ！」

「あぁっ……もう……汚いなあ」

「な、何言ってるの!？」

思わずコーラを逆流させてしまった俺は、とにかく落ち着きを取り戻すため、飛び散った飛沫を拭いた。

「見た？」

「何言ってるんだよ……」

「見たんだ？」

「つか、今日のユキちゃん何か変だよ？」

落ち着きを取り戻した俺は改めてコーラを一口飲み、ポテトを1本ずつ、ユキちゃんが答えるのを待つように、少しずつちまちまとかじった。

「それは、お互い様だと思う。カズくんも変。ずっと考え事してるみたいだし」

「俺は、ユキちゃんがいつもと違うから、何かあったかと思って考

えてただけだよ」

半分は本当で半分は嘘。

もつと他に色々、邪な考え事もあったけど、でも確かに半分くらいはユキちゃんが心配だった。メールの誘い方にしても、化粧にしても、服装にしても、言葉にしても、顔色にしても、態度にしても。いつものユキちゃんはハートの絵文字なんて使わないし、俺と会うときは大抵スツピンだし、Ｔシャツにシーパンみたいなラフな格好で、ヒールのある靴なんか絶対履かないし、自分で自分のことをお姉さんなんて言わないし、あんなに悲しそうで不安な顔なんて見たことがなかったし、他の女の子に嫉妬したり、俺に対しては女の部分を見せようとはしなかった。それが俺の中にある、いつものユキちゃん。今日のユキちゃんとはひとつとして共通点のない、俺の大好きなユキちゃん。

「あーあ……。私もカズくん心配されるようになってしまったのか
……。」

「俺だつてそれくらいするさ」

ユキちゃんは、頬杖を付いて窓の外を眺めながら、深く沈んだ目をしていた。ただ遠くを見つめ、俺という存在も視界に入っていないほど遠くを見つめ、何かを思い出していた。

声をかけるべきなのか……。

それとも何も言わないほうがいいのか……。

考えたところで、やっぱり俺にはまだどっちが正しいのかわからない。ただ、正直に言うならば、声をかけたくても何と云っていいのかがわからなかった。

そのまま１０分、２０分。実際には１分、２分くらいしか経っていなかったかもしれない。とにかくユキちゃんをこっちの世界へ連れ戻さないといけなと感じた俺は名前を呼んだ。

「ユキコ」

「えっ……？」

少し驚いた表情でユキちゃんは振り向いた。

「おかえり」

「ただいま……」

ばつが悪そうなユキちゃんはポテトを1本くわえ、視線を下に落としていた。

ここで会話が途切れてしまったら、たぶんこの霧は今日一日晴れないだろう。

だから、賭けではあったけれど俺は言葉を止めなかった。

「何かあったの？俺には言えないこと？」

「うん。いや……言えなくはないけど……」

「無理にとは……」

言いかけた俺の視界に何かが落ちるのが見えた。

何かじゃない。涙。一粒だけではあったけど、確かにユキちゃんの目から涙が零れていた。

「ごめん。そういうつもりじゃなかったんだ」

「いいの。ごめん」

再び溢れて零れ落ちそうになっていた涙をハンカチで押さえながらユキちゃんは顔をあげた。

「本当はそのためにメールしたの。カズくんといったら気が晴れるか

なつて。

それに、もしこうなつてもカズくんなら話せるから」

「そっか……」

「私さ、フラれたんだ」

失恋か。思っていたよりは普通で想定内だった。でもそれは好ましいことではなかった。自分の好きな人が自分の知らないところで誰かを好きになつていた。そして、その誰かも知らない相手に悲しい思いをさせられていた。でもその事実には俺は何も言うことはできない。それはユキちゃんの自由だし、今は離れたところにいるんだから俺が知らないのは当然だった。

「彼氏いたんだ……」

「うん。ほら、大学生になつたつてだけで私も浮かれてたのよ。サークルの勧誘で知り合つただけけど、ちょっとカッコいいだけで私も付いて行っちゃって

後から聞いたけど、そういうのって多いみたいね。一年生狙つてひと夏の恋で終わらせるの。

私もそれにまんまと引つかかっちゃったわけ。

私は変なことはされてないからいいけど、やることやって捨てられたなんて話もあるみたい……」

「大学つて怖いんだな……」

「色んなところから色んな人が集まってくるから、そういう人も結構多いのね……」

でも、本当にその人のことを好きになりかけてたから

全部遊びだったんだって気付かされたときは、本当につらかった

……」

「良くも悪くも、俺達ってこんな田舎で育ったから、そういう免疫がないんだよね。」

「だけど、それだけユキちゃんが純粹だったってことだよ」

「夏休みで帰省してる間に浮気されて、それでお前はつまんないから別れるなんて」

「なんか、すごく悔しいよ……………」

膝の上で両手をグツと握り締め、嗚咽を噛み殺しながら涙を流すユキちゃんをそれ以上放ってはおけなかった。

でも、俺に何ができるのだろうか……。泣かないでと言って、泣き止んでくれるのだろうか……。

もしかしたらそれは逆にユキちゃんを追い詰めてしまうことになるかもしれない。

じゃあどうすればいい……。

ふと、俺の脳裏に昔の光景が蘇った。

「泣きたいなら好きなだけ泣け。泣いて泣いて、好きなだけ泣いたら笑え。」

笑って笑って、泣いた分だけ笑え。そしたらみーんな忘れちゃうから」

それは俺のおばあちゃんが昔言っていた言葉。俺やユキちゃんや、子供が泣くとおばあちゃんはいつもそう言っていた。それで実際俺達が泣き止んだのかなんてそんなことは覚えていないし、今重要なのはそこではなかった。

俺は少し身を乗り出して、ユキちゃんの頭をそつと撫で下ろし、頬に伝う涙を親指で拭うとその言葉を言った。

「泣きたいなら好きなだけ泣け。泣いて泣いて、好きなだけ泣いたら笑え。」

笑って笑って、泣いた分だけ笑え。そしたらみーんな忘れちゃうから」

「懐かしいこと……言わないでよ……。全然似てないし……」

気付けばユキちゃんの涙は止まっていた。俺の下手くそなモノマネの効果もあっただろうか。口元は少し上がり、微笑んでさえいるようにも見えていた。

「これ、食べちゃおうぜ」

せつかく泣き止んだところで深く掘り下げてしまふのは得策ではない。

俺は残りのチーズバーガーをいつもより少し豪快に大きな口で飲み込んだ。ユキちゃんもそんな俺につられるように残りのハンバーガーとポテトを食べ終え、少し遅めのランチを少し長めに取り終えた俺達は店を出た。

その頃にはもうユキちゃんの顔は晴れやかに、さっきまでのことなど全く気にしていない様子で、その姿に俺も安心して、いよいよ”デート”の始まりだと気分も弾みだしていた。

「カズくん、ちょっと付き合ってもらえる？」

「いいけど、どこに？」

「靴買いたくなって。なんかこのヒール疲れちゃった」

それには大賛成だ。と言っても、まだユキちゃんがどんな靴を買うのかはわかっていない。でも、俺は勝手にスニーカーのような動きやすい靴を買うものだと思っ付けていた。

「どっちがいい？」

世の女性諸君に心の奥底から言いたい。

その聞き方は男にとつては究極の選択を迫られているようなものであると。

大体、Aが良いと言えばBも良くないかと言われ、Bが良いと言えばAが良くないかと言われる。仮にそうでなかったとしても九分九厘自分の中で決まっている答えと違うほうを言ってしまったら、どっちがいいかと聞いておきながら男の意見なんてそれこそ九分九厘採用されないのである。

しかし……。

聞かれてしまったら答えないわけにもいかないのだ……。

片方ずつに別のスニーカーを履いて問いかけてくるユキちゃんの足を品定めしつつ、それくらいは究極の選択を迫られる対価として受け取ってもいいだろうとわけのわからない言い訳をしつつ。どうみても片方は白くてどこに履いていくにも無難な色。もう片方は蛍光色の黄色が眩しいちよつとユキちゃんにはないような色だったから、白がいいんじゃないかと言うと、ユキちゃんも納得した表情で私もそう思うと言ってくれた。

無事に靴を買うとユキちゃんはその場で履き替えて、さっきまで履いていたヒールはスニーカーの箱の中に追いやられていた。そして当然のようにそれは買い物袋の中に入れて、俺の手にぶら下がっていた。

「やっぱりこっちの方が歩きやすいわ」

「うん。そっちのほうが似合うと思う」

もちろん、白か黄色かじゃなくて、ヒールかスニーカーか。幸か不幸か、さっきの涙のせいでマスカラが少し落ちたこともあって、靴

を履き替えたユキちゃんはそれだけでいつもの姿にぐっと近づいていて、これも怪我の功名と言うのか言わないのか、いずれにせよ俺は少し安心していた。

「なんか、スッキリした」

さて、これから行くあてもなくフラフラと歩き続けてきてしまっていた俺達は、いつの間にか駅前の繁華街から遠ざかり、周りには何も無い田んぼの中の農道を歩いていた。

「気が済んだ？」

「うん、ありがとね、付き合ってくれて」

いくら残暑が厳しいとは言え暦の上ではもう秋、さすがに午後5時を周ると日が傾き始めている。この辺りは暗くなってしまうと街灯も少ない場所だから、そろそろ解散というところだろうか。でも俺達の足はどちらも家の方向へは向いていなかった。どちらからともなく、このまま別れてしまうのが惜しいような寂しいような、まだもう少しだけこうしていたいという想いを重ね合わせていた。

「たしかこっちの方に神社あったよね」

「ああ、あるけど」

「せっかくだし、お参りしていこうよ」

それはまだこっちに住んでいる俺でも今はあまり行かない場所。年に数回、初詣とか豊作祈願とかそういう時にしか来ない場所だった。

「やっぱりこういう小さいほうが神社って感じ」

それは褒めているのか貶しているのか。でも、確かに有名な大きい

神社を神社と言われるよりは、こつした小さくて地元住民しかお参りに来ないような神社のほうが馴染みもあつてしつくりくるものがあつた。

賽銭を投げ入れて鈴を鳴らし二拝二拍手一拝。

今の時代、何も言わずにこの作法ができる高校生大学生はどれくらいいるだろうか。と、少しだけつまらない自慢をしてしまう邪念を振り払って願いを込める。

顔を上げると、丁度同じタイミングでユキちゃんも顔を上げ、一瞬だけ目が合うと、俺達は自然に手を繋いで参道を歩いた。

「覚えてる？昔ここで遊んでたよね」

「大人が祈禱してもらってる間な」

「ああいう木とかよく登ったよね」

懐かしい思い出。都会へ行ってしまったユキちゃんの心の中にもまだそれが残っていることが嬉しかった。

「木登りなんて、もう出来なくなっちゃったかな……」

「俺はまだ出来るよ」

自慢ではないけれど木登りなんてものはこの歳になっても朝飯前だった。「ほらっ」と簡単によじ登って見せて、下から見上げるユキちゃんに手を差し伸べた。するとユキちゃんもスカートであることなど忘れて俺の腕にしがみつきながらも懸命によじ登り、登り切ると俺が後ろから抱きかかえるようにして一番太い枝の上に2人で座った。

「こんなきれいな夕日久しぶり」

山の向こうに沈んでいく夕日を眺めながら、ユキちゃんが言った。

「東京はやっぱり夕日は見えないの？」

「そんなことはないけど、でもやっぱり違うかな」

「でも、羨ましいな。逆に俺は東京の夕日って見たことが無いから……」

「ビルに隠れちゃって、ほとんど見えないけどね」

俺にはそのビルに隠れる夕日すら完璧には想像出来なかった。

「でも、いいんだ。俺が知らないものでもユキちゃんが教えてくれる」

それは、ユキちゃんがお姉さんだから。俺より1つ年上だから、俺よりもすべて一年早く経験している。小さいときからそう、ユキちゃんは俺より色んなことを経験して知っていて、俺が初めて経験するときにはいつも手を取って教えてくれていた。

「私にだって教えられないことはあるよ？」

それにもう全部が全部私のほうが先ってわけでもないでしょ？」

「いや、俺はこっちに残るし、新しいことはたぶんみんなユキちゃんのほうが先だと思う」

俺の言葉にユキちゃんは少し困惑しているようだったが、俺自身それでいいと思っているわけではなかったし、いつかは自分がリードしたいとも思っていた。

「でも、俺も受身ばかりでいるつもりじゃない。

ユキちゃんはお姉さんだから、それを越えるのは難しいかもしれ

ないけど、

でもユキちゃんにちゃんと向き合ってもらえるように、せめて対等に思ってもらえるように、

俺も頑張らなきゃって思ってる」

「私はもう対等に思ってるよ。カズくんもこんなに大きくなったんだし」

確かに昔はユキちゃんのほうが身長は高かった。でも、そんなのは男と女なんだからいつか俺がユキちゃんより大きくなるのはわかってたし、そういうことじゃないんだと言おうとしたけれど、ユキちゃんは「わかってる」と言って、さっきまで少し前屈みになっていた体を俺を背もたれのようにして寄りかかって、俺の腕を何かの道具のように自分の前できつく交差させた。

「私が大学で何の勉強してるか知ってる？」

母さんからユキちゃんが東京の大学へ行くと聞いたあの日、俺は詳しいことまでは聞かなかった。強がって、自分の気持ちを見透かされるのを嫌って、何の興味の無い振りをしていた。その態度がやっぱりまだ子供だったんだ。それ以来、どこの大学でどんな勉強をしているのか、聞きだそうとしていたわけではないけれど、俺は興味が無くてでもすでに知っているものだという扱いになってしまっていたから、改めてそれを聞き出すチャンスは失われてしまっていた。だからこうしてユキちゃんと直接話すくらいしか俺がそのことを知る術は残っていなかった。

「農業とか畜産とか環境とかね、そういう勉強してるの」

「ユキちゃんって農大だったんだ」

「えっ？知らなかったの？」

「うん、東京っただけしか聞いてなくて。でも、何で農大なの？」

境内を吹き抜ける風が青々とした葉を揺らす。木々の揺れ動くその音を聞くだけで心地良く、涼しささえ感じられた。

「実りの秋ってよく言うでしょ？人間もそれと同じで、秋が一番実る季節なんだって。

ひと夏の恋なんて言って、夏が恋の季節みたいにみんな言ってるけど、

本当に真剣に人が恋を出来るのは、一番実ることの出来る秋なんだってさ」

それは答えになっていなかった。

理解しようとして、でも、そんなことはどうでもよくなった。

まだまだ暑さの残る毎日だけど、夕暮れに吹き抜ける風は確実に秋の装いを始めて、そんな初秋の薫り漂うこの場所でこうして2人いられることがとても幸せで、それだけで俺達の心は満たされていた。

それから数日。9月も半ばになり、ユキちゃんも大学の夏休みの終了と共に東京へ帰っていった。

少し肌寒く感じるのは、季節がすっかり秋に変わったせいだろうか。それとも、あれから毎日隣にいた彼女が居なくなってしまったからだろうか。

でも、俺はあの日の熱さを忘れてはいない。それさえあれば、この肌寒さにも負けずに実ることが出来る。

彼女もきつとそうであると信じて、また次の季節に出逢うために。

雪色の笑顔と 前編

「そろそろ……かな」

上り電車を見送った俺は、入れ替わりでホームに入ってくる下り電車を待ちながら、踏切の音に耳を傾けていた。

19時55分。正確な時間を聞いたわけではなかったけど、”これから乗り換えるところ”と、途中駅からメールをしてきた時間から察するにもうそろそろ着く頃だろう。駅まで迎えに来てほしいと頼まれたわけではない。それは単純に俺なりの優しさ。ちよつとしたサプライズのつもりもあったけど、でもやっぱり少しでも早く逢いたいだけだったりもした。

ゆっくりと電車がホームに入ってくる。

電車が少しずつ速度を落として止まろうとするのと反比例するように鼓動は少しずつ早くなっていく。あの電車に乗っているのだろうか。しかし、残念なことに車の中からはホームに降りる乗客の姿を見ることが出来ない。仕方なく俺は改札で彼女を待つことにして車を降りた。

「寒っ……」

暖房の効いた車内から一步外に出ると、さすがに年も末。そこは雪も降りそうなほどに凍てついた空気が支配し、さっきから外を歩く人を全く見かけないのも頷けるほどに冷え込んでいた。でも、それくらいに寒いほうが頭が冷えて、冷静になって彼女を迎えるのには丁度良かったかもしれない。そんなことを考えながら俺は改札の前でポツポツとまばらに出てくる人々をやり過ごした。

ガタンという音と共にモーターの回転数が上がっていく。電車が再び発車したようだ。

さてどうしたものか、彼女はまだ現れない。
もしかしてこの電車には乗っていなかったのか。そんな不安さえよ
ぎり始めた頃だった。

（いた……！）

気付いた瞬間の顔は自分でも分かるほどにほころんでいた。でも、
彼女のほうはまだ気付いていないらしい。いつ気付くか、どこで気
付くか、一歩ずつその距離を縮めていく彼女をとて愛らしく思っ
て見ていた。

腕に提げていたバッグの中からICカードの入った財布を取り出し
それごと機械にかざして改札を抜ける。そしてようやく顔を上げた
彼女はその姿に気が付いた。

「あつ………！」

「迎えに来た」

軽く右手を挙げて答える。

「えっ、だって私、時間とか言ってるじゃないよ？」

「メールくれたから、大体これくらいかなって」

本当は1時間以上も前からここに居たことなど言えるわけがない。
1時間以上待っていたというより、時間の計算を間違えて1時間も
早く来たのだから……。

「寒くなかった？」

「うん、車だから」

そう言っただけは停めてある車の方を少し遠慮気味に指した。

「外車とか高級車ならこういうのもカッコいいんだろっけ……」
「そうね。60点かな」

60点という評価に現実というものを見ながら、俺達は可愛らしい軽自動車に乗り込む。

「軽トラよりはいいだろ？」
「それ、0点」

普段日常で大活躍してくれている軽トラがあまりにも可哀想だろっと思いつつ行き先を尋ねる。

「家に送ればいい？」
「どっかイトコでも連れてってくれるの？」
「馬鹿言つなよ」
「冗談よ。せつかくだから夕飯食べに行かない？ 私まだなんだ」
「ああ。じゃあどこにしようか……」

飲食店の立ち並ぶ国道へ出るため、駅前交差点を右折する。

「あつ、あれがいい、あそこ。去年帰ってきたときに行ったところそれは自家製のパンや自家栽培の野菜を使った料理を提供している店で、去年の夏のオープンしたての時に2人で行った店だった。」

「ああ、いいね。じゃあ……」
「じゃあ……」。

信号を左折して、次の信号も左折して……。

最初の駅前の交差点を左折すれば素直に行けたのにとはいつつ、俺は車を走らせた。

「でさ、その子にもやっと彼氏が出来たわけよ！
なんかもうそれだけでみんなで大騒ぎしちゃってさ」

半年間会えなかった分、色々と話したかったことも溜まっていたのだろう。面白い教授の話、レポート課題の話、新発見したスイーツのお店の話。そして今は、男性が苦手だったという友達に彼氏が出来たと言う話。もう止めようとしたところで止まらないだろうし、楽しそうに話すユキコを止めようとも思わなかった。

「そっといえば……さ……」

コーヒーカップを口元に当てたユキコの口調が急に意味深げになる。その急な変化に俺も心を落ち着かせようとコーヒーを一口啜って向き合った。

「ああ……。うん……。やっぱり何でもない……」

「何でもないって、逆に気になるよ」

「すみません、そろそろラストオーダーの時間なんですけど、何かご注文はございますか？」

なんとタイミングの悪いことが。いや、それこそ逆にタイミングが良すぎた。

結局、その後ユキコからその先の言葉を聞くチャンスは失われ、ついに気が付いたときには家の前。ユキコはシートベルトを外しドアに手を掛けていた。

「じゃあ、またメールするね」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

パンツとドアが閉まるのを確認して、イマイチ晴れ切らない気分のままブレーキを踏み、ギアをDに入れ直す。

”コンコンッ”

降りたはずのユキコが窓を叩いて俺を呼んだ。
何か言い忘れたことでもあっただろうか。

「初詣、絶対一緒に行こうね」

「今年こそは」

去年は自分が風邪をひいて行けなかったことを思い出し、苦笑いで答えて、手を振り合って別れる。

あの時言いかけたのはこの事だったのだろうか。

いや、もっと思えば悩んだ顔をしていた。

俺は何かユキコを悩ませるようなことをしていたのだろうか。

しかし、それは本人に聞かなければわからないことだった……。

” 23時に行くね ”

そう送られてきた彼女からのメール。

約束。

中学の同級生と忘年会をして、一応22時には帰り酔いを醒ましてから来ると言っていたから、大方、うちに来た後は紅白でも見て、見終わってから初詣に行けば時間的にも丁度良いという計算だろう。俺もおおよそそんな感じで良いのではないかと思っていた。

さて、時刻はまだ18時を回ったところ。夕飯にも早いし、かと言

って大掃除はもう済んでしまったし、特にすることもないままに、さつきからただのんびりとコタツでミカンが続いている。

????????。

またメールだ。ユキコが何か言い残したことでもあったのだろうか？口に運びかけたミカンを一度房の中に戻し、俺は携帯を手取る。ああ、ジュンさんからだ――。

”忘年会しないか？”

と、丁寧に件名まで付けて来た。すでに始まっているのだろうか、本文には店の場所が記されている。

(18時……、あと5時間か……)

”行きます”

ジュンさんは昔から世話になっている先輩だから、それだけでも誘いは断れない。それに今はバンドのギタリストとしてデビューして東京で生活しているからこういう機会でもなければ帰省も出来ないし、俺も会うことが出来ない。久々の再会ということもあり、俺が返事に迷うことはなかった。

携帯と財布を左右のポケットに押し込んで、母に一言、「忘年会行ってくる」とだけ告げ、玄関先でコートを羽織って俺は家を出た。昨日積もった雪がまだ一面を白く覆っている。幸い凍ってはいないから滑る心配は無さそうだ。

店は、歩いて五分ほどのところにある居酒屋。俺は少し小走りですの場所へと急いだ。

「遅せーぞ、カズキ」

俺の到着を見計らっていたのか、店に入るとそこにジュンさんが立っていた。

「ああ、すみません……」

「いいよ。こつち」

俺はジュンさんの後に続き席へと通された。四人まで座れる個室。しかし、そこに人が居た形跡は一つだけだった。

「あれ？ 一人ですか？」

「たまには二人だけで飲むのもいいだろ？」

「ああ——」

「生中、一つ」と、丁度通りかかった店員にジュンさんが注文する。当然それは俺の分だ。

ジュンさんは兄貴というか、本当に面倒見のいい人。それでいて気取らず飾らず、しかし熱いわけでもない。端整な顔立ちにクールな性格。だから今日もただ酒が飲みたいだけで誘ったのではないことが分かる。何か俺に話があったか、本当に一年に一度は俺と会いたいと思ってくれているかどちらかだ。

「乾杯」

「お疲れっす」

ビールが運ばれ、乾杯を交わして、俺は一気に半分ほどを飲み干す。こういうときは相手が誰であれ一口目は多少勢いを持たせたほうがいいものだ。

「急だったけど、平気か？」

「丁度、暇だったんで」

「彼女とかは？」

「彼女も忘年会行ってますから」

ジユンさんはユキコのことを知っている。直接面識があるわけではないが、ジユンさんには色々と相談をしたこともあったし、写真を見せたこともあった。

「うまくいつてるか？」

「どうつすかね……」

「いつてないのか？」

「いやぁ……」

話題がそうなるのはもはや酒の席では定番か。しかし、ジユンさんも土足でいきなり踏み込んでくるようなことはしない。俺が話すならば聞く、話さなければ話題を変える。それがジユンさんのスタンスだった。

「やっぱり、ちょっとは悩むこともありますね……」

「悩む？」

「休みのときにしか会えないのはもう慣れたんですけど、

逆に、居ないことにも慣れちゃったって言うか……」

「会えないときも連絡は取ってるんだろ？」

「取ってますけど、やっぱり違うんですよ……」

ジユンさんは「なるほどなあ」と腕を組む。そして、そのまま両腕をテーブルに載せて俺に言う。

「いつも一緒に居るから相手のことが分かると思ってたけど、

離れてみて分かることも実は多くて、それに戸惑ってるんだな」
「そんな感じっす……」

ジュンさんが考えた後の一言は常に的確だ。だから頼りたくなってしまう。この人なら答えを知っているような気がして。それはいつかジュンさんの彼女のヒカリさんも雑誌のインタビューで答えていた。"ジュンは私が悩むことの答えを全部知ってるんです。だから私は付いていくだけなんです。時々その上から目線がムカつくこともありますけど（笑）"と。その気持ちに共感しつつ、ならばと俺はジュンさんに相談を始めた。

「何を考えてるかが分からなくなっただんです……」
「例えば？」

「何で不機嫌なのか、何で怒ってるのかとか……」

「今までは全部分かってたのか？」

「はい。ほとんどは」

「今はどれくらい分かる？」

「半分……も分からないんです……」

ジュンさんはそれが深刻になり過ぎないように、枝豆をひとつひとつ頬張りながら俺の話を聞いていた。

「半分分かれば、充分だろ？」

「いや、でも……」

「正直、俺はヒカリが何で怒ってるのか、三割も分からないな」

「そんなもんなんすか……？」

「まあアイツはちょっと変わってるし、参考になるかは分かんないけどな。」

でも、よほど仲の良い奴でもない限りはそんなもんだと思うよ」

そうなのか……。

でも、俺はそのよほど仲の良い相手だと思っていた。それなのに分
からなくなってしまったのは、やはり離れてしまったからに他なら
ないのだった。

「お前達は、知らないことが多すぎるんだよな」

「それは、思います……」

いつかの夏休み、それは俺がユキコに言ったことでもあった。都会
に対する免疫が無かったユキコは、その環境に戸惑い涙を流した。
そのときは俺も知ったような口でユキコを慰めたりもしたけれど、
結局のところ、自分も今以外の環境に対する耐性が無かったという
ことなのか。ユキコに諭していたはずの自分が、ジユンさんに諭さ
れている。それがいい証拠だった。

「喧嘩なんてしたことないだろ」

「ほとんどないですね……」

「それは良いことばかりじゃないんだよ」

喧嘩をしないに越したことはない。それはおそらく誰もが思うこと。
好きな人と喧嘩なんてしたくないし、出来ればずっと波を立てずに
仲良くいたい。でも、俺達は極端にそれが少ないのもまた事実だっ
た。特にここ最近、なかなか会えない反動からか、喧嘩のけの字
も見えないほどに穏やかな日々しか過ごしていない。そんな姿をジ
ユンさんにも他の誰にも見せていたわけではないけれど、少しの相
談でそれを見抜くのは、さすがとしか言いようが無かった。

「一つだけ、カズキに忠告するよ」

「何ですか……？」

そんな言葉をジュンさんの口から聞いたのは初めてだった。いつもの穏やかな表情がいささか険しく厳しくなっている。

「喧嘩を知らないまましていると、たった一度の喧嘩が致命傷になり兼ねないからな」

「別れるかもしれないってことですか……？」

「それは本人次第」

言っているのがジュンさんだから、俺は余計に恐れをなした。世紀の大予言と呼ばれるものは過去にいくつもあつてそのどれもが外れてきたけれど、そんなものよりも遥かに高い確率でこの予言は的中してしまいそうな気がしていた。

「脅かさないでくださいよ……」

弱り口調で和やかな雰囲気に戻そうと試みる。しかし、それは出来なかった。

「百聞は一見に如かず」

「どうすればいいんですか……」

俺はすぐに助けを求めた。しかし、それも許してはくれないほど、今日のジュンさんは難かった。

「それは、お前達がぶつかって越えなきやいけない壁なんだよ。今からでも少しずつ経験していかなきゃいけないんだ」

俺は追加で注文したビールが運ばれてくるなりそれを一気にあおった。いくらジュンさんとは言え、止めても聞くつもりはない。そんな覚悟だった。でも、ジュンさんは止めなかった。むしろ、俺に付

き合つて次々とジョッキを空けていった。そして、最後には二人揃つて完全に潰れてしまった。高々とそびえる壁に怖気付いて錯乱へと逃げた者への代償。そんなものが頭によぎるほどの余地は無く、度を超えた酩酊は大切なものさえ忘れさせた。今は何もかも忘れてしまいたい。嫌なもの難しいもの面倒なもの、すべて今年に捨てて、まっさらな状態で新年を迎えればいい。

だから俺は時間さえ忘れた。

朦朧とする意識の片隅で聞こえる携帯の振動音。しかし、何度か震えては止まつてを繰り返していた。その都度、意識が少しだけ戻つては消えてゆく。

かすかに残る正常な思考が必死に何かを訴えかけている。

何だっけ……？

ああ、ここはお店だから、ここで寝てちゃいけないんだ……。

ようやく身体を起こし、続いてジュンさんを起こす。そう言えば約束があつた。と、何食わぬ顔で俺は思い出す。床に転がった携帯を拾い上げ、液晶画面に表示される時間を確かめる。

” 23時59分—— ”

—— 今年もあと1分か。

—— 違う。

—— 約束。

時刻と共に、着信6件という文字が見える。

—— ユキコ

—— ユキコ

—— ユキコ

——ユキコ

——ユキコ

——ユキコ

俺は財布から適当にお札を抜き取りジュンさんの手に握らせる。そして、コートを羽織る間もなく腕に抱え、とにかく自宅への帰路を急いだ。

——。

ザクツ。ザクツ。と、こちらへと歩み寄る足音だけが響く。
家の前、降り出した雪に傘も差さずに待っていたと思われるその人影。

頭や肩に積もった雪が、一歩ずつ落ちては消えてゆく。

足音は俺の直前で止まり、そして、俺を見上げた。

「……………おめでとう」

「あ……………ああ……………おめ——」

——パシンッ——！！

冷えきった頬を冷えきった掌が乾いた音を立てて打ち抜いた。
頬がこれだけ痛いことから、その手も相当に痛かっただろう。
いや、違う……………。

痛いのは頬でもなく手でもなく、心。

ユキコは俺に肩をぶつけながら俄然強く降り始めた雪の中に消えた。
あれだけの酩酊にあった俺の意識はすっかり冴えていた。

そして、妙なほど冷静になった俺はユキコを追った。

頬を叩き肩をぶつけながらもユキコは神社に続く道を歩いて行った。
ここで追わなければ……………。

ジュンさんの言葉が脳裏によぎる。

ユキコにはすぐ追いついた。

しかし、振り返ることも隣に並ばせることもしてはくれなかった。同じように年明けと同時に初詣へやってきた人の列、並ぶ間も会話は無い。

一緒に鳴らすはずだった鈴も、2回鳴った。

自分だけの祈りが済むと踵を返し甘酒を受け取ることも焚き火で暖を取ることもせず、ユキコは来た道を同じように歩いて行った。

これ以上追いかけていいものか……。

ユキコの家と俺の家を分ける十字路。

ユキコは真っ直ぐ行き、俺は右へ曲がらなければならない。最後まで送り届けるべきか、これ以上はもう触れぬべきか。俺の迷いとは裏腹に、ユキコは躊躇無く進んでしまう。

「……ユキコ」

十字路の真ん中で立ち止まってしまった俺は、せめてもの思いで彼女を呼んだ。

「……………」

答えてはくれない。

でも、足を止めてくれた。

「ごめん……。本当に、ごめん……」

少しこちらを振り向くような素振りも見せてはくれたが、横顔すらハッキリとは見えない程度だった。結局、ユキコは何も言ってくれることはないままに再び歩き出し、俺はもうその背中を追うことは出来なかった……。

「それは、俺も悪いことしたな……」

あの日以来、ユキコの笑顔を見ていない。

電話で少しだけ話すことが出来たが、それは向こうから掛けてきたたった一度だけ。

こちらからのメールや着信は、すべて無視されていた。

そして、今となってはもう会うことは叶わなくなってしまった。

「でも、まさか帰られるとは思ってなかったです……」

ユキコは東京へ帰ってしまった。”三箇日も終わったし、向こうの友達にも会いたいから帰る”とのことだった。ユキコが帰った日、その日は以前から観に行こうと言っていた映画を観に行く予定だった。しかし、それもキャンセルしてユキコは帰ってしまった。

「”期待しすぎてた”って言われちゃって……」

「うーん……」

ジュンさんは自分にも責任があるからと、こうして俺の話を聞いてくれていた。でも、ジュンさんには何の非もない。俺があらかじめ約束のことを言っていればよかったことだし、そもそも時間を忘れて飲み始めたのも俺。だけど、俺一人ではもう何の解決策も浮かんでこなかったから、無理を言っただけでジュンさん呼び出していた。

「追いかけるしかない……な」

「追いかけれなくて……」

帰ると告げられた俺は、とにかく駅へと走った。そして、今まさに改札へ向かおうとするユキコを見つけ、肩を掴んだ。一瞬驚いた表

情をして、しかし、その表情はすぐに強張った。

そして言われてしまったその言葉――。

自分との約束が先にあり時間まで決めていたにもかかわらず、俺がジユンさんとの付き合いを優先したことを確実に根に持っていた。俺の手を振り解き、ICカードひとつで入場を許されるユキコはその大きな壁を易々と乗り越えていった。もちろん俺もすぐに追いかけようとした。電車はまだ来ないから切符を買う時間もあつた。しかし、どこまでを買いえばいいのかも分からない。持ち合わせの小銭だけで果たして東京まで追いかけることが出来るのか。そんな知識すら俺は持ち合わせていなかった。改札の前で立ち尽くす俺に見向きもせずユキコは階段の奥に消え、本当に見えなくなってしまった。ルールを無視してとにかく一駅分。もしくは、そんな改札飛び越えてしまえばよかったのに。今となっては、そんな後悔が浮かぶばかりだった。

「本当はこんな風に渡すつもりじゃなかったんだけど……」
「何ですか……？ それ」

ジユンさんは見慣れぬ細長い紙を2枚取り出すと俺の前に置いた。

「チケット。俺のライブの」
「ああ……」

おそらく、俺達に楽しんでもらうために用意した物だったであろうそれは、本来の意図とは違う形で使われることになってしまうことになるのか……。

このチケットもある意味では被害者の一人だった。

「それ、渡しに行け」
「はい……」

ジュンさんは、俺に謝罪以外の口実を与えてくれた。その気持ちを無下にしないためにも、俺は行かなければならない。出来ればそれは今すぐにでも。

居ても立つても居られなくなった俺は、ジュンさんに礼だけを言って一度家に戻った。

別れ際、ジュンさんは住所が分かれば最寄り駅も分かるからその後で教えるようにと言ってくれたから、俺はその通りにユキコの住所を教えた。するとジュンさんは経費と経路と使用路線を分かりやすくまとめたメモをメールで送ってきてくれた。

この通りに行けば、そこにユキコがいる。

見えなくなってしまうた背中を追うため、俺は越えられなかった壁の向こうへと足を踏み入れた。

く雪色の笑顔とく 後編

「じゃあ、14時に学校集合で」
「うん」

明日の新年会の予定を決め終わると、話題は自然とそちらへ向く。私も覚悟は出来ていた。冬休みに入る前から、私は新年会は出られそうにないと告げてしまっていたから。それがここへ来ての一転ぶり。「何で？」とか「彼氏は？」とか「帰って来ちゃって良かったの？」とか、覚悟はしていたけれど、実際に聞かれてしまうと言葉に詰まってしまうのだった。

「喧嘩？」

「喧嘩じゃない……けど」

「喧嘩でしょ、それ」

「そうかもしれないけど……」

「そうなんじゃん」とあっさり断定されてしまい、私はさらに言葉を失くす。

「まあ、それは彼が悪いわ」

「だよね……？」

「ってか——」

「ホントにちゃんと付き合ってるの？」と、最も脆い場所を深く鋭く抉られる。

「たぶん……」

私にはそれしか返す言葉がない。

「たぶんって……」

「幼馴染みの延長線上みたいなの……」

「それ、付き合ってるって言わない」

そう、私達ははまだ正式な恋人になってはいなかった。夏休みと冬休みには必ず帰省して、その度にデートのようなことを重ねてきたけれど、まだ私もカズキもハッキリとその言葉を口にしたことはなかった。

小さい頃からずっと仲が良くてずっと一緒にいたからお互いに気付いていないわけではなかったけれど、改めてそれを意識して声にしてしまうと、何か今までのようには上手くいかなくなってしまふのではないかという怖さもあった。

でも……。

そんな友達以上恋人未満のような状態になってもう2年。この曖昧な関係もそろそろ変えなければいけないと私は思っていた。それに、もしこれから先カズキの前に大きな誘惑が現れたとして、今ここでカズキをしっかりと掴まえておかなければカズキがいつその誘惑に負けてしまふかもわからない。だから、今年の冬休みの帰省の目的はただひとつ。

カズキに好きだと言わせること。そして正式に恋人になること。

自分から言うのはたぶんもっと簡単なのかもしれないけど、自分から言ってしまったらまたカズキにお姉さんという印象を持たれてしまいかねないし、そういうのはやっぱり男性から言ってもらいたいというのが本音だった。

「皆には言わないでいてあげるし、そういう話にもならないように

してあげるから、

新年会だけやったらちゃんと帰って話し付けて来なさいよ」

「うん……」

「分かったの？」

「分かった……」

「じゃあ、切るよ。また明日ね」

「うん、またね」

電話が切れると共に私は深く溜め息を吐く。

「ゆーきーちゃん。あーそーぼ！」

ふと間髪を容れず遠くからそんな声が聞こえて、私は我に返り窓から外の様子を窺った。いやしかし、そんな風に私を呼ぶ人は今ここに居るはずがない。ましてやその声はまだ子供。ほら、この子かは分からないけど、とある一軒家の玄関先で健気にそのゆきちゃんが出てくるのを待っている男の子が居る。

ふと、その男の子に誰かの影を重ね合わせてしまう。

きっとアイツもあんな風に私のことを待っていたのか……。

そんなことを思ってしまうと、この二人の様子をもう少しだけ見ていたい。そんな気持ちになってしまった私は、窓を開けてベランダに降りた。

奇遇にも同じ呼び名だった女の子。しかし奇遇なのはそれだけではなかった。男の子に呼ばれて姿を現したその子は、幾分男の子よりも大きく見えて、どうやらその子のほうがいくつか年上のようにだった。

（なにそれ……）

もしも神様が居たとしたら、私になんてものを見せ付けてくれてい

るのか。やめてと言わんばかりの苦笑が唇にも込み上げてきていた。

「どこ行く？」

「どこ行く？」

「公園行く？」

「公園行く？」

ゆきちゃんが聞いて、男の子が木霊のように返す。男の子にすれば、きつとお姉ちゃんであるゆきちゃんの真似をしなくなる年頃なのだろう。私もそれは実体験として持っているから、なんとなく察しが付く。いつも私のやることを真似しようとして、出来なくて失敗してよく泣いていた男の子が居た。その度に「ずるい！」なんて言われて、でもそんな彼をとても可愛く思っていた。

思えば、私達にもそんな頃があっただんだ……。

生意気にもすっかり大人びてしまって、憶えているようで忘れてしまっていた懐かしい日々。公園へ行ったのか、いつの間にか二人の姿はどこにも見えなくなっている。あの2人もいつかは大人になって、こんな風に思い返す時が来るのだろうか。

その時、2人は同じ場所に立っているのだろうか。

少なくとも、私はそうはなれなかった。

人は出逢い、そしていつか必ず別れの時が来る。

”死ぬまで一緒”

諦めではなく半ば当然のようにそう思い、そこに居続けるものだと思っていた存在。

でも、今、私の隣には誰も居ない。

自分から距離を置いてしまって、今さら恋しくなんて思っているわけではないけれど、当然だと思っていたことがある日突然そうでなくなってしまうたら、戸惑いもあり寂しさもある。

心にぽっかりと穴が開いてしまったような感覚。

本とは言えば、カズキが私との約束を忘れて飲み明かしていたのが悪いんだ。私だって忘年会には行っただけ、ちゃんと時間通りに家に帰っていた。それが当然だし、カズキは何も言っていなかったから家に居るものだと思っていた。でも、23時を過ぎ何分が経っても玄関が開くどころか、連絡一つ私には届かなかった。家に電気は点いているけれど、もしカズキが居ないとすれば他には誰も居ないのは分かっていた。おじさんもおばさんも、毎年町内会の人と集まって年を越す。私達も小さい頃は一緒にいていつて、そこで年を越していた。もう親と一緒にいくような歳でもなくなってくると、自然と私達はあぶれた者同士で一緒に年を越すようになって、それが自然な成り行きで何の違和感も感じない当然のことだと、その時は思っていた。

でも、それは私だけだったのかもしれない。

去年はカズキが風邪をひいてしまって、一緒には過ごせなかった。私としては、看病するのが当然だと思って、何か消化の良い物を作ってあげようと買い物まで済ませてカズキを訪ねた。しかし、カズキはうつすといけなからと私を家には上げてくれなかった。初めてではないけれど、一緒に新年を迎えられないことがこれほど寂しく感じた年はなかった。

そして、今年。

前回の反省を活かし、健康には充分注意している様子が見えていたからその心配は要らなかった。むしろ、今回は私のほうに予定が入ってしまったって、自分のことに神経を使わなければならない状況だった。そんな中で起きてしまった事件。でも、約束だから初詣には行った。やっぱりそれがないと一年が始まらないような気がして、前回一人で行ったという虚しさもあったから、カズキは何も話しかけて来なかったし隣さえ歩こうとしなかったけど、でも2人で行った。カズキがそうしよとしなかったのは、私が少し強く当たってしまったせいだと思う。最初はツンとして不機嫌だけをぶつけようとしていたのだけど、そんな気持ちも本当にあっただのかと自分でも

疑いたくなるほど、強く当たってしまった。

頬にビンタ・肩をぶつける・1人で先を歩く。

強弱の順序が真逆になってしまっていた。さすがに頬を叩いてしまったのはやりすぎたと後悔した。冷えきった手で叩いたから、家に帰ってからジンとした痛みと痺れが消えなかった。でも、最初にそんなことをしてしまったから、もう自分の中で後には引けなくなってしまうのだと思う。

本当なら映画を見る約束があった。でも、仕返しのようにそれをドタキャンした。

こっちの友達に新年会に誘われていたのは本当。でも、いつもの私ならカズキを優先させた。だけど私は友達を優先させて今ここにいる。

帰るのはまた次の長期休暇でいい。このままで良いわけなんて一つもないけれど、会いたくないわけではないけれど、会えない。もしそれで距離が開いて溝が埋められなくなってしまっても、それで答えが出るのなら私はそれでよかった。

いずれにしても、私は答えが欲しかったのだ。

曖昧な関係に終止符を打って一つ先へ進むのか、それとも本当に終止符を打ってしまうのか。

どっちでもいいなんて言ったら嘘になるけれど、今の状態が続くよりはそれでもよかった。

諦め半分、後悔半分。

別れることなんて慣れている。私とカズキの間には年齢という境界線が常に存在していたのだから。

「小学校って楽しい?」「中学校って楽しい?」カズキのそんな声は忘れない。「楽しいよ」と決まって返していたけれど、本当は何か物足りなさも感じていた。それが何かに気付いたのはもっと大人になってから。その頃はまた来年になればと無意識で思っていたから、たった一年の別れはそれほど気にも留めていなかった。そして私が東京に出てきてからもそれは同じだった。長期休暇になれば帰

省するわけだから、ずっと会えないわけではない。今までもそうやってきたし、それを続けられるのだと思っていた。

でも、それは少し甘い考えだった。

今までの別れは単に通う場所が違っただけ、家に帰れば普通に顔を合わせられた。でも、今回は違う。家に帰ってもカズキを確認できるのは携帯電話の中の味気ない文字だけ。だから、私は他の男にすがったりもした。浮気ではないから、それくらいのことはしてもいいと思っていた。そんなことそれまでの自分だったら考えもしなかったことだっただろうに……。

それでいてそのショックをカズキに慰めてもらったりもしていた。

結局、何もかも耐えられなかったのは私のほうだった。

カズキは何も変わっていなかった。会うたびに少しずつ大人になっていたけれど、いつでも純粹で、子供っぽく弟のようなところもあって、ずっと私のことを好きでいてくれた。だけど、相変わらずそれを私に言おうとはしなかった。言わなくても分かっていることだけど、それがあるとないとでは大きな差があった。だから、私はそれにも耐えきれなくなって答えを求め急いだ。

そして私達は危機的状況に陥ってしまった。

このベランダから遠くの空を眺め続けている限り、やっぱり後悔のほうが大きいのかもしれない。向かいのマンションで布団を叩く主婦のその生活観を漂わせる音も、さっきの子供達の発する無駄に大きなはしゃぎ声も、付けっぱなしだったテレビから流れ続けているアナウンサーの陽気な声も、すべてが虚しく色が無い。

”——ピンポン”

そんなチャイムの音だって、うつかり聞き落としてしまうところだった。

宅配業者だろうか……。

何かを頼んだ覚えはないけれど……。

それとも友達でも来ただろうか……？

隣のおばあちゃんが煮物でもお裾分けに来てくれたかな……？

様々な推測を浮かべては消しながら、私はインターホンを取った。

「——はい？」

「あ……ユキちゃん？」

俺……カズキだけど……」

「えっ……」

半信半疑。でも、その声は確かに彼のもの。

チェーンを掛けたままのドアを少しだけ開き外の様子を伺うと、確かに間違いないカズキはそこにいた。

「えっ……何で……？」

「これ……」

カズキが何かを差し出そうとして、私は「ちょっと待って」と一度ドアを閉め、チェーンを外して再びドアを開いた。

「入っていいよ」

「……うん」

一月の寒空の下に置いておくのは可哀想だから、私はそれまでの何もかもを無しにしてカズキを家に上げた。私が先にコタツに入ると、カズキは向かい側に座る。そして、先ほど渡しかけた物をコタツの上に置いた。

「これを渡しに……」

「チケット……？」

「先輩のライブチケット、2人で来ないかって」

「わざわざそのために来たの？」
「うん……」

そんなものは郵送でもすればいい。と、この期に及んで悪態をつきそうになつてしまい、いつまでもそんな強情な態度を取り続けようとする自分を反省した。しかしそれ以外の言葉がなかなか出て来ず、妙に空いてしまった間を埋めるため、私はチケットを一枚手にとつて眺めてみた。

「だめ……？」

「何で？ 先輩が2人で来いつて言つたから？」

「え……」

「もしそうだったら行かない……」

チケットを戻し、カズキに委ねた。

そんなつもりはなかったけれど、その答えによつては私の答えも決まる。

でも、信じていた。

そんな人ではないと。

「違う。ただ仲直り出来ればいいなつて……」

「仲直りしたいの？」

「したくないの……？」

「別に怒つてないから大丈夫だよ」

「怒つてなくても、このままは嫌なんだよ……」

「何で？」

「こんな喧嘩が原因で会えなくなつちゃうとか、嫌だろ……」

「大丈夫だよ、ちゃんとまた次の休みにも帰るし……」

素直じゃないなと自分でも思った。こうして仲直りするためにわざ

わざわざ来てくれたというのに、それだけで無条件に受け入れてあげればいいだけなのに、なぜそれが出来ないのかと自分に問い掛けている。

「好きな人と喧嘩して、そのままでもいい奴なんていないだろ」

一瞬、ドキツとした。

視線を上げると二つの視線が重なり合う。
カズキは真っ直ぐに私だけを見ていた。

「俺は、ユキコが好きなんだよ。」

だから仲直りもしたいし、来年こそはちゃんと2人で初詣に行きたい。

このまま離れ離れにはなりたくないんだよ」

視線を落とし「……ごめん」と、私は謝った。

「そんなこと言わせるつもりじゃなかった……」

「いいよ、分かったことだろ……」

「でも……」

込み上げる涙が視界を歪ませる。

カズキがコタツを抜けた気配を遠くに感じ、視線を上げようとした次の瞬間、頭上のほうからスツと長い腕が伸び、私の身体は温もりに包まれた。

「ずっと言えなくて、ごめん……」

「……うん」

私が望んで待ち焦がれていたのはたったそれだけのこと。たったそ

れだけのことが待ちきれなくて、出来もしない駆け引きなんてしようとして、それがすれ違いを生んで……。

信じて待っていていようと決めたのは自分だったのに、いつの間にかそれすらも忘れてしまっていた。そんな愚かな自分を一途に見つめ続けてくれていたのだから、今度は私が素直にならなければいけない番だった。

「私こそ、いっぱい謝らなきゃいけない……。」

カズキの気持ちを知ってたのに彼氏作ってその相談をカズキにしちゃって、

年下なのがコンプレックスだって知ってたのにお姉さんぶっちゃって、

色々思わせぶりの態度を取って惑わせちゃって、

全部がただ私が寂しさに耐えられなくて焦ってしちゃってたことで、

いつも振り回されてたのはカズキのほうで……。」

「もういいよ」

抱きしめる腕がギュツときつくなり、それ以上の言葉が遮られた。

「ユキコが俺を好きでいてくれたら、俺はそれでいいから」

「——大好きだよ」

「もう幼馴染みには戻れないかもしれないけど、いい？」

腕の中で深く私は頷いた。

気付けばいつも一緒にいて、でも、自分がいつも一年先に進学するから常に一年間の別れがそこにはあった。一年経てばまた必ず会える。一定期間ごとに繰り返し別れと出会い。プライベートではずっと一緒に遊んだりしてきたから、そんな別れと出会いはすっかり忘

れてしまっていた。

しかし、今、それとは違う形で別れてしまおうとしている自分。年齢というどうしようもない壁によって別れさせられてしまっていた頃とは違う。今は自分が年の差を言い訳にして、別れを切り出してしまおうとしていた。別れても100%離れ離れになっってしまうことは絶対にないんだという根拠の無い自信。たしかに実家に帰れば近くにいるし親同士も知らないわけじゃないから会うことは出来るでも、だからと言ってそれが別れてもいい理由になんてならない。それに、また会えることを期待して別れるなんて、それは変な話。想いが届かないから、思い通りにいかないから、少し距離を置きたくなっているだけ。そんな一過性の感情ですべてを終わらせてしまつたら、この先絶対に後悔する。大丈夫。こうして後を追ってきてくれる彼なのだから、素直に言いたいことは言えればいい。そうでなくともずっと一緒に生きてきた人なのだから、今さら何も躊躇うことはない。ただ今までとは少し違う何年間かを過ごしてしまつて、その感覚が薄れてしまっただけのこと。だつたらその感覚に戻るために、彼といるときは思いつきり羽を伸ばしてしまえればいい。そのほうが彼も喜んでくれることはもう知っているし聞いている。それならば、迷う理由はもう何もない。彼の想いを受け止めて、自分の想いもぶつけよう。だって、それが私の望み。彼とは絶対に別れたくない。彼のことが好きだから。彼を愛しているのだから。そしていつか来る新たな出会いの日を夢見て、私は彼の全てを受け止める。もう涙なんて要らない。好きなだけ泣いたから、今度は泣いた分だけ笑えればいい。

私が笑えば、彼も笑ってくれるから。

「やつと笑つた」

「泣いた分だけ笑わなきゃ」

「そうだね」

好きな人が笑ってくれる。そんな単純で当たり前のことが幸せで、
私達は自然と笑みがこぼれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7639x/>

SnowSmile

2011年10月20日23時03分発行